

社会的な状況から生み出されたのか、多面的・多角的なアプローチが求められているのである。

## コメント 東洋史

矢澤知行

今回のシンポジウムでは、四国遍路と世界の巡礼について、さまざまな視点からの研究成果が披露された。いずれも、各分野における最新の研究動向を反映した報告であるとともに、今後の研究にとって重要な課題を数多く提供するものであった。

東洋の分野からは、五嶽の一つに数えられる南岳衡山を題材に論じた加藤国安氏による報告「霊山と癒し——中国の南岳をめぐる——」が得られた。加藤報告は、南岳衡山の開祖慧思と、その「転生」者との説もある聖徳太子、さらには慧思を尊崇し、その「転生」地である日本をめざした鑑真という三者の結びつきを示す内容であった。

本稿では、加藤報告をはじめとする諸報告・講演の中から浮上してきたいくつかの課題について記し、今後の遍路・巡礼研究の可能性・方向性について考えていきたい。

まず、第一は、「大陸と日本列島とのつながり」という視点である。両者の間には、慧思—聖徳太子—鑑真のみならず、時代を通じてさまざまなつながりがみられた。例えば、大陸へ渡った求法巡礼僧としては、遣唐使に加わって長安に至り、『入唐求法巡礼行記』を著したことで知られる円仁や、昨年に加藤講演でも採り上げられた『参天台五臺山記』の著者成尋らとその代表例であろう。近年、彼ら巡礼僧に関する研究をはじめ、大陸と日本列島とのあいだの民間の多様なつながりを解き明かそうとする研究が脚光を浴びている。今回のシンポジウムにおいても、平安時代の四国遍路について論じた寺内報告の際に、フロアから、大陸からの影響はどのようなものであったか、という趣旨の質問が寄せられる一幕もあった。大陸から日本列島への密教の伝播は、けっして一方向的なものではなく、双方向的な運動の中からもたらされたものである。今後は、遍路と巡礼に焦点を据えつつ大陸と日本列島間の多様な双方向的なつながりを捉えなおす作業がもっと求められよう。

第二点は、ひろく東洋全体へと視野を広げることの重要性である。例えば、四国遍路の持つ密教的要素を考察する上で、重要な視点を提供しうるのがチベット仏教である。仏教の原点としての性格を今なお強く持ち続けているといわれるチベット仏教には、輪廻転生の思想に象徴されるような独特の世界観・宇宙観がみられる。加藤報告のキーワードでもあった「転生」の背景には、衆生を救済するため転生しつづけるチベットのリンポチェ（活仏）の存在と共通するものをはっきりと認めることができる。

また、チベット仏教には、いたるところにコルラと呼ばれる時計まわりの周回運動がみられる。四国遍路とも共通するこの周回運動は、右邊とよばれる古代インドの礼法に由来するといわれるが、同様の周回運動でも、メッカにおけるタワーフ（反時計まわり）や、四国遍路におけるいわゆる「逆打ち」などと比較して、空間の把握方法の特質を総合的に再検討する余地がある。

さらに、チベットでは、山や湖を神聖視する宗教観が根付いている。例えば、カン・リンポチェ（カイラス山）やその山麓に位置するマナム・ユムツォ（マナサロワール湖）に対する信仰がその好例である。カン・リンポチェは、チベット仏教だけでなく、ボン教、ヒンドゥー教、ジャイナ教の信者たちにとっても「世界の原始の中心」と位置づけられる普遍的に神聖な存在であった。また、山というものの聖地としての性格に焦点をあてれば、今回の加藤報告でとりあげられた南岳衡山や、寺内報告で述べられた中世日本における山岳信仰との関わりも注目される。

最後にもう一点、遍路・巡礼研究にとって重要と思われる課題を提示しておきたい。それは、巡礼にお

る「移動」の価値観の再検討である。つまり、巡礼という行為の本質を探究するにあたって、普段から「移動」を生業とする非定住民（たとえば遊牧民）などの存在も考慮に入れる必要があるように思うのである。

今回の内田講演では、前年の渡邊提言を受けつつ、巡礼者が共同体から離脱して、①死を選ぶ、②もとの共同体に戻る、③新たな生業につく、という三つの可能性があることが示された。たしかに、巡礼者と所属共同体との関係は、巡礼という行為を理解する上できわめて重要な視点である。しかし、相対的に定着度の低い大陸の人々にとって、ましてや厳しい自然環境の中で「移動」することを苦しめない人々にとって、巡礼という行為はやや異なった位相を帯びているのではなかろうか。例えば、五体投地をしながら高山カン・リンポチェの周囲を延々とまわり続けるチベット遊牧民にとっての巡礼を、江戸時代の定着的社会に生きた人々にとっての遍路と比較した場合、どのような相違点が浮かび上がってくるのだろうか。遍路・巡礼研究を進めていく上で、巡礼者の共同体意識や「移動」価値観の多様性をめぐりこうした問題を意識しておくことも必要であると思う。

さらに、人々の「移動」とそれを常態化する都市ネットワークの形成によって発展を遂げたイスラーム世界にも目を向けておきたい。都市的宗教・文化としての性格を色濃く持つイスラームの世界において、ズールヒッジヤ（巡礼月）に各地から膨大な数の巡礼者たちが押し寄せる巡礼都市メッカは、多様なヒトやモノの環流する都市ネットワークの心臓部ともいえる存在である。したがって、メッカ巡礼の持つ経済的側面には注目すべき点が少なくない。例えば、巡礼者市場の形成やディヤーファと呼ばれる貧しい巡礼者へのもてなしの慣行など、他の遍路・巡礼と比較して考察すべき要素が多くみられるのである。今回の内田講演で、「働きたい」というお遍路の申し出を認めた「抱え宗門」に関する事例が紹介されたように、あらゆる遍路・巡礼研究にとって、ヒトやモノの「移動」と、それに伴ってあらわれる経済的側面の考察は不可欠な位置を占めているものといえよう。

以上、今回のシンポジウムの講演・報告をふまえつつ、今後の遍路・巡礼研究の可能性・方向性の一端を示してみた。とくに、「大陸と日本列島との双方向的なつながり」は遍路・巡礼研究のいっそうの深まりに、「多様な東洋への視野の拡大」は研究の幅の広がり、それぞれ寄与するものと考えられる。

## コメント 西洋史

関 哲 行

総合討論は四国巡礼に関する報告と質疑応答を中心に、多種多様なテーマにわたり、筆者の乏しい能力をもってしては、これらを咀嚼することは至難の業である。従ってここでは、筆者に関係の深いサンティアゴ巡礼などの地中海世界の巡礼との比較を念頭に、若干の所感を述べ、全体討論のコメンテーターとしての責めを塞ぎたい。

まず指摘したいのは、四国巡礼とカトリックの巡礼との親近性である。霊的救済と病氣治癒などの現世利益を希求する巡礼者、巡礼者の社会的結合としての巡礼講、巡礼者への慈善活動（お接待）、移動手段としての徒歩の重要性などがそれであり、他界観（観音浄土、西方浄土）についても「地の果て」の聖地サンティアゴとの共通点が顕著であった。イスラム教やユダヤ教の巡礼では、移動手段としての徒歩の重要性が減退するとはいえ、これらの親近性は他の様々な宗教圏の巡礼行にあっても確認される可能性が大きい。巡礼行が巡礼者の生地（共同体）と聖地を結ぶ、聖俗両要素を内包した儀礼運動、儀礼を介した既成社会（日常生活圏）からの一時的離脱行為であることを考えれば、宗教圏の相違に関わりなく、こうした共通の要素が検出されるのは当然であろう。巡礼歌や演劇（浄瑠璃）を通じた情報伝達、奇跡譚、聖地のコスモロジーやシンボリズム、終末論（末法思想）との関連、観光行動にも類似性が強く、歴史学、文化人類学、文学、宗